

属の研究助手等がその準備運営等に全面的に協力している。その研究会は次のようである。

1 浄土宗教学布教大会

昭和二十二年より関東と関西で隔年に行なわれた浄土宗教学(布教)大会はすでに四十数年の歴史を有するものであって、浄土宗教団として重要な学術研究会である。研究所創設以来全面的に協力する。

2 日本印度学仏教学会

すでに四回会場校を引き受け協力する。

3 浄土宗大辞典の編纂

4 浄土宗寺院所蔵、韓国文化財日韓共同調査研究

平成元年より行なわれ、現在継続中である。

5 日独仏教文化交流研究会

ドイツ、フィリップス大学マールブルクの教授との研究交流を行ない平成三年三月十八日には日独仏教文化交流研究会を開いた。

6 仏教文化研究所・社会学研究所合同特別講演会

昭和六十三年十月、アメリカ、カリフォルニア大学名誉教授J・A・クローセン先生を講師に招き社会学研究所と共催でターミナルケアについての特別講演会を開く。

7 その他

研究所において『法然上人全集』索引作成等々が企画されていて、現在調査研究の継続中であるばかりでなく、研究室においてハンブル講座、中国語講座等が有志の研究助手等によって行なわれている。

以上

上記の研究所の各種事業はいづれも若手の先生、助手等の大変な協力によって完遂することが出来た。今回仏教文化研究所が発展的に解消されるにあたり、協力を得た諸事業を列記して、あらためて深い謝意をあらわすものである。

◇研究助手報告◇

禅林寺所蔵『釈浄土群疑論』元徳版

について

村 上 真 瑞

『釈浄土群疑論』にはいかなる版本、写本が現存するか調査しそれらを年代別に整理して索引作成の底本にはどの本を用いるべきか考察してみたいと思う。

『釈浄土群疑論』宝永版巻第七の刊記には義山によって次のように記されている。

今依延応寛元建長寛永印本及古徳書写数本以為校讎黜譌從正新成一本若其有疑則闕焉而俟後賢之是正耳

宝永二歳次乙酉十二月八日

洛東華頂釈義山書^①

これによれば、義山が宝永二年(一七〇五)に開版した当時、過去において延応(一二三九～一二四〇)、寛元(一二四三～一二四七)、建長(一二四九～一二五六)、寛永(一六二四～一六四四)の四回の開版があったことが伺われる。現在、私が知る限りの『釈浄土群疑論』の写本版本をあげるならば次のものがある。

七寺一切経本、(一一七五～一一八〇)平安末写本 二巻のみ

建長版、建長二年(一二五〇)一部欠本

元徳版、元徳二年(一三三〇)全巻

桑普了的书写本(一六〇八～一六一六)全巻

寛永版、寛永三年(一六二六)全巻

万治版、無刊記(一六五九以前)全巻

寛永版、宝永二年(一七〇五)全巻

したがって、義山の見た鎌倉から江戸期の版本の中で断片ながらも残っているものは建長版であり、完全にすべてが見られるものは寛永版であり、それら以外の鎌倉期の版本はすべて散逸してしまっていることが理解できる。また、義山がその名をあげていない版本も現在に伝えられていることが解るのであろう。これらの中、平安末期の七寺一切経所蔵本については、華頂短大落合俊典氏の発見によるもので、写本である。

実物の複写が現在私の手元に存在する。また、鎌倉末元徳版については、『釈浄土群疑論』の索引を製作する上で、様々な版本、写本を比べて文字の異同を調査している

内に鎌倉時代に彫られた版本が、禅林寺に存在することが判明し、その存在を実物にあたって確かめようとして調査を進める内に元徳年間の摺写であることが判明したものである。また鎌倉時代の版本としては、すでに、東京の大東急記念文庫に断片ではあるが、建長版の『釈浄土群疑論』が存在していることが判明している。この建長版については既に平成元年度浄土宗教学大会において、宝永版、万治版、了の書写本との比較対照研究を試みた。しかし昨年の特典では、禅林寺所蔵の元徳版『釈浄土群疑論』については、目録上で確かめることにとどまっていた。すなわち、『浄土教文化史論』によると、

68 釈浄土群疑論第五 懐感 京都市左京区 禅林寺蔵

鎌倉時代刊

(表紙墨書) 沙門真恵

○『京都大蔵会第二回展覧目録』所出。
と記され、『大蔵会展覧目録』によると

111 釈浄土群疑論第五 一冊 永観堂蔵

表紙ニ「沙門真恵」ノ墨書アリ

と記されるように、鎌倉時代の版本第五巻だけではあるが禅林寺に存在することが確かめられていた。しかしこれが延応、寛元、建長のどの版にあたるのか、またはそれ以外のものなのかについては明らかにはなっていない。

ところが本年この禅林寺所蔵の版本がどのような物であるのかを禅林寺職員富永氏を通じて確かめたところ、刊記に元徳二年という年号のあるもので鎌倉時代のものもあり、しかも全巻揃っているとのことであった。このことは後に華頂短期大学助教授落合俊典氏から複写していただいた『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一によつて確かめることができた。すなわち、

○釈浄土群疑論 懐感撰 七巻

鎌倉時代の版、粘葉綴、六行十七字詰、刊記なければ共、是の版は、建長二年比丘往成が開版せる群疑論の後摺にして、現存往成版の刊記(第七巻奥にあり)を省略して、今この古版には、其処に墨書して曰く、

元徳二年四月 日摺写校点畢

為三興隆弘法三贈三末代学徒三專後見行者必憫三志趣三矣

黒谷末流 沙門 真恵

とありて、真恵が摺写の志願を述べて居る。又表紙に、沙門真恵の墨書あり。然して各巻頭見返には、恐らく真恵が分別手記せるものと見るべき科判章名が誌されて、当代に於ける群疑論研究の資料たるべきものが墨書されて居る。

と示されるように全七巻揃って刊記だけが墨書で、建長版の後摺であろうとされている。

そこでさつそく禅林寺に閲覧と写真撮影をお願いしたところ五十嵐隆明教学部長より許可をいただいた。実物を見たところ虫食いも少なく完全な形で保管されていた様子が解った。鎌倉時代の版本としては唯一の完全なものであるだけにこの元徳版の存在は非常に重大なものである。写真撮影については、仏教大学図書館三輪晴雄氏のご協力によって専門家によるマイクロフィルム撮影が行われ、仏教大学図書館に現在そのマイクロフィルムは収められている。

そこで東京大東急記念文庫に収蔵されている『釈浄土群疑論』建長版との比較をして次の表のような相異が見出された。ただし時間が限られていたため一字一句に至る詳細な比較は残念ながらできなかった。

この対照表によるとだいたい体裁は同じであり、文字もまったくといって良い程酷似している。最初は『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一に示されたとおり、建長版の後摺りであろうと思っていたが、第一巻より所々に文字の相違が見出されてきた。最も顕著な相違は、第三巻で元徳版には、三行にわたる挿入がされていたのである。また、体裁はそのままでも一行十七文字であるべきものに一文字挿入して十八文字となっている場所も第三巻と第七巻にそれぞれ見出された。

このような結果から考察するならば、禅林寺に伝わる元徳版の『釈浄土群疑論』は、たんなる建長版の後摺りではなく、建長版の補刻版というべきものであることが判明したのである。

今回貴重な資料を閲覧させていただきその上マイクロフィルムに撮ることまでお許しいただいた禅林寺教学部長五十嵐隆明氏、そして元徳版の所在をお探しいただいた富永氏、またマイクロフィルム撮影に多大なる御協力をいただいた、佛教大学図書館三輪春雄氏、藤堂祐亨氏に心から感謝申し上げる次第である。

さて以前より『釈浄土群疑論』に関する研究をする上において、索引が存在しないことについて大いに不便であることを実感していた。すでに東本願寺の真宗教学研究所からは『浄土論註総索引』^①が、龍谷大学の真宗学研究会からは、『浄土三部経索引』^②『撰撰集索引』^③『観経四帖疏索引』^④等が刊行され多くの学者がその恩恵を被っている。そこで、私は、『釈浄土群疑論』においてもこのような索引を作製して、中国の仏教、浄土教を研究する人々に少しでも貢献できないものかと考えていた。しかし、大学のスタッフを集めてカードとりをして何年もかけて仕上げるようなまねは到底私にはできないこともよく解っていたので、個人の力をもってこれらの大学で作製した索引以上のものを作るにはどのような方法が一番よいか考えてみた。

そこで考えたのは、パーソナルコンピュータを用いて手作業の何千倍ものスピードでかつ正確な作業をしようかということであった。たまたま私の普段使っているコンピュータのコンソールタントであるサミットコンピュータシステムの伊藤行人氏に相談したところ既成のソフトを用いて『積浄土群疑論』の本文を総べて打ち込むならば、それに対する、一字索引も熟語索引も自在に検索して打ち出すことができるソフトを開発していただけることであった。

そこで『積浄土群疑論』の本文を打ち込む作業に入る訳であるが、いかなるソフトを用いるかがまず問題となる。市販のワードプロセッサの多くは検索機能も持ち索引造りに最適かと思われる部分もあるが、一つの文章を打ち込むことのできるメモリーの容量が限られているという欠点が存在する。『積浄土群疑論』全7巻を入れようとするならば一四〇kバイト(漢字約七〇〇〇文字四〇〇字原稿用紙一七五枚分)ほどのメモリーを必要とする。一文で一四〇kバイトもの長文を読み込むことのできるワードプロセッサはその当時存在しなかった。メモリーの容量できる限りを入れて別々のファイルに分けて保存しておくという方法もあるが、それでは『積浄土群疑論』全体を検索して索引を作ることが非常に困難となる。

そこで伊藤行人氏に相談したところ、いくらでも読み込んでメモリーがいっぱいになればまた不必要な部分をはき出して読み込み、検索することができるとソフトが存在することがわかった。コンピュータプログラマーがソフトを製作するのに用いているエディターと呼ばれる文書作製専門のソフトがそれである。今回伊藤氏にすすめられて用いたエディターは、RED+^④という名称のもので日本語入力フロントエンドプロセッサについては、私が以前より使っていたFIXER^⑤を組み込んで日本語入力をすることにした。

FIXER^③を用いた理由については、次の三点をあげることができる。(一)以前より使っていて使い勝手がよく解っていたという点、(二)辞書の圧縮が可能であり、不必要な単語は総べて消去することができること、(三)辞書の登録した単語は、すべて五十音列の一覧表となってエディター等により見ることができ打ち出すこともできるといふ三点である。

このことを利用するならば、あらかじめ辞書に登録すみの単語を総べて消去しておいて、『積浄土群疑論』を打ち込むたびに一語一語辞書登録していくことにより、『積浄土群疑論』の打ち込みが完成した時点において、検索すべき単語が総べて辞書の中に五十音順に並んでいるということになる。また、辞書にすでに登録すみの単語は変換時において画面に示されるので重複して登録することも同時に避けられるといった利点も見逃すことができない。

以上の理由からRED+^④にFIXER^⑤を用いて『積浄土群疑論』を定本と同じ形態をとって、一行の文字数も同じにして打ち込んでいった。

文字については、できるかぎり定本に忠実な文字を第一水準、第二水準のコードからひろっている。第二水準にもない文字については、MS-DOS^⑥の外字フォントに作製している。外字の作製においても、偏と旁を別々の文字から切り貼りできるように、ワードプロセッサ・テラ3世^⑦の外字フォントをMS-DOSのフォントにコンバートできるソフトも伊藤行人氏によって開発していただいた。現存すでに打ち込みは終わり、索引はいつでも打ち出しができる状態となっている。

打ち込んだ『積浄土群疑論』の本文は、現在は宝永版を定本としているが、コンピュータによる、わずかな校異によって、その他の本を底本として検索することもできる。

それでは今回伊藤行人氏の開発した索引製作ソフトの特長について述べてみたい。今回の索引製作は、龍谷大学真宗学研究会による一連の索引に近い状態で打ち出せることを目標として作製していただいた。したがって、熟語の検索においては、その熟語が存在する一行を総べて捨出し熟語は括弧で括られて打ち出されるように設計されている。

索引製作のソフトは、現在市販されているものもあるが、熟語の二行にわたるながいものについては検索不可能である。伊藤行人氏の開発したソフトは、長い二行にわたった熟語についても検索可能であり、その場合は熟語を含んでいる二行を拾い出して示すように設計されている。

今回は、定本を写真印刷によってそのまま索引にのせることによって誤値を最低限に止めたいと思っている。熟語存在位置を示すのに、何巻・何帖、何行という表示が必要となってくる。これらの要求も総べて満たして自由に表示形態を選ぶことができるように設計されている。

さてここで、どの本を底本として採用するかが重大な問題となってくる。写本については写真版にした時読みにくいことがあるので除くとすれば版本に絞られる。実際版本を見た時唯一鎌倉期のもので完全に残っている元徳版についてはまず考えてみたい。本文には真意によって訓点があつてあるのでオリジナルそのものとは言うことはできないが、その訓点についても鎌倉期の漢文の読み下しの仕方を研究するのに貴重な資料となりうると考えれば十分価値のあることである。残る江戸期の物の中から選ぶならば、宝永版については、すでに『浄土宗全書』の序本となっていることもあり、また、義山による独自の読み替えが多く指摘されることから、それ以外のまだ世に頭わされていない物から選ぶべきかと考えるのである。そこで上がってくる物としては

寛永版と万治版である。万治版には刊記がなくおおよそ万治年間以前のものでであろうという推定のもとに万治版といわれる物であるから刊記にはっきりと刊行年代が記されているものの方がより良いものといえるであろう。そこで最後に残るものとしては寛永版である。これは、法然院に所蔵されているものを見たが文字もはっきりして書き込みもなく底本としては最高の物といえるであろう。そこで最後に残るのは、元徳版と寛永版との二本である。この二本の中から一本に絞るとするならば、現存完全に形が残っている唯一の鎌倉期の版本である元徳版の採用が一番有力となってくるのである。

以上のようなパーソナルコンピュータソフトを設計していただいたおかげによって、個人では到底時間がかかってできそうもない索引造りも最小限の労力によって正確なものを作ることができるといえるという明るい展望が開かれたということができよう。

煩雑な要求を満たしてソフトを完成していただいた伊藤行人氏に心から感謝申し上げます。次第である。

註① 宝永版『釈浄土群疑論』巻第七刊記

- ② 『尾張資料七寺一切経目録』一二六頁(番外三函)
- ③ 京都市左京区永観堂町48 禅林寺図書館
- ④ 東京都世田谷区上野毛3-9-25 五島美術館内大東急記念文庫
- ⑤ 『釈浄土群疑論』諸本の研究 仏教論叢34号
 佛敎大学仏敎文化研究所所報8号
- ⑥ 藤堂祐範著『浄土敎文化史論』四〇九頁
- ⑦ 昭和五十六年文華堂書店刊『大藏会展観目録』三五〜三六頁
- ⑧ 『禅林寺所蔵図書館収蔵典籍目録』第一、二六頁〜二七頁
- ⑨ 『浄土論註総索引』真宗敎学研究所編昭和四十七年九月二〇日発行
- ⑩ 『浄土三部経索引』龍谷大学真宗学研究会編昭和五十四年二月二〇日発行
- ⑪ 『選択集索引』龍谷大学真宗学研究会編昭和五十六年三月二〇日発行
- ⑫ 『観経四帖疏索引』龍谷大学真宗学研究会編昭和六十二年二月二〇日発行
- ⑬ FUJITSU FMR-60
- ⑭ 伊藤行人氏

サミットコンピュータシステムズ

名古屋市天白区植田大久手上一九五〇五

TEL 電話 052-804-8228

- ⑮ Multi Screen Editor RED++ (株) LIFEBOARD
- ⑯ 日本語入力キャプチャ FIXER3 (株) シティソフト社
- ⑰ MS-DOS Microsoft-Disk Operating System 16ビットコンピュータ用基本ソフトウェア米国マイクログラフ社
- ⑱ 龜吒慙切辨抄標機坑鞞恒炷嚙物恣摠耽詎燭、等
- ⑲ 日本語ワードプロセッサテラ3世 (株) 日本マイコン販売社

建長版、元徳版『釈浄土群疑論』相異点对照表

建長版(建長二年一二五〇)

体裁 縦二十五センチ
横一五・五センチ

粘葉綴

元徳版(元徳二年一三三〇)

体裁 縦二十五センチ
横一五・五センチ

粘葉綴

(第一巻) 不離(五)界

安法師(恵)悟而(ノイの行)時量

(第三巻) 人(天)始迄今

与過(三行なし)観不能滅

(第一巻) 不離(三)界

安法師(随)悟而(行)時量

(第三巻) 人(天)始迄今

この行は天が入って18文字となっている。
 与過(去久遠善根純熟故能一念得罪滅也四功德勝者前小乘行但作四念処観不能滅无量罪如経具説故一念念仏功德滅罪今念) 観不能滅三行挿入されている。

(第七巻)

(如)何見請 得解脱也(謹)

請(陳) 座地()令諸四衆

有()優婆夷見佛

(第七巻)

(聖)何見請 得解脱也(満)

請(陳) 座地(起)令諸四衆

この行は起が入って18文字となっている。
 有(多)優婆夷見佛
 この行は多が入って18文字となっている。